往来

俺は既に孤立した
甲冑に身を固めた人々の中で

俺は常に言われた、丁重に
「忙しいので」と

騎士(ナイト)たちは俺を見もしなかった
鎧を着けない身軽な俺を

騎士たちは感じもしなかった
すれ違いざま肩がぶつかり合っても
だが俺は常に傷がひりひりとした
その甲冑は冷ややかに硬かった

俺がその兜の隙間から
彼らの眼を覗き込もうものなら
俺はいつでも手ひどく打たれた
籠手の一撃はひどく骨にこたえた

確かに俺は乞食だった、蹴飛ばされる
俺は確かに飢えていた、温もりに

騎士たちの快楽に望みを託した俺は
彼らと同じく、暗い閨(ねや)へ
鬱々とした欲望の粘液の床へ
深く、息苦しく沈みもした・・・

日の光に甲冑のきらめく、賑やかな往来で
今日も俺は飢えていた
今日も俺は乞食だった

(1982.4.9)